夢に殉ず（上）

曽野綾子

Sono Ayako

人間らしく生きるとは

ペガサスの国からやってきた
天馬翔に託して描く
魂の自由を追求した
人間讃歌の傑作

朝日新聞社

夢に殉ず 下

曽野綾子

Sono Ayako

朝日新聞社

夢に殉ず　下

一九九四年十月一日　第一刷発行
一九九四年十月二十日　第二刷発行

著者　曽野綾子
発行者　天羽直之
発行所　朝日新聞社
〒104-11　東京都中央区築地五-三-二
電話　〇三-三五四五-〇一三一（代表）
編集・書籍第一編集室　販売・出版営業部
振替　〇〇一〇〇-七-一七三〇
印刷所　大日本印刷
製本所　清美堂製本
© Sono Ayako 1994
Printed in Japan
ISBN4-02-256742-2
定価はカバーに表示してあります

夢に殉ず　下　目次

誠実 7
山薯 32
服の裏の悪魔 86
話し相手 117
穏やかな夫婦 143
歯痛 164

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

鱈ちり　205
待つ間　227
一枚の絵　259
悪魔の囁き　285
安南の壺　315
連載を書き終えて　345

装画　藤田龍児
「オーイ野良犬ヤーイ」より
装幀　菊地信義

夢に殉ず　下

誠実

天馬翔は、JR山手線の、電車の向かい側のシートに坐っている若い細身の男を、もうさっきから、何度も眺めていた。

人の顔を覚えることにかけては人後に落ちない、と言うほどでもないが、その男が坂下さくらと同棲していたバレエ・ダンサーのピカちゃんこと、佐田光に間違いはないと思う。舞台の上で何分間も見つめていたのだから、顔や体の特徴をよく覚えたのである。

翔がためらっていたのは、ただ彼に声をかけるべきかどうかということであった。かけたくもあり、かけるのが面倒だという気分もある。

そういう時、翔はいつも運に選択を委ねるのであった。わざわざ、即刻、彼の前に立って行って、吊り革につかまりながら「さくらさんのことですがねえ」などと切り出すほどのことではない。そのうちに彼が降りてしまえば、それで終わりである。しかしもし彼の隣の席が空いたら、移って行って話すのも悪くはないような気がしたのであった。運という奴は、右顧左眄

して小賢しい計算をする優柔不断な人間と違って、すぐ答えを出すから翔は好きなのであった。運は、きっぷのいい博打うちのようなところがある。

二駅ほどでピカちゃんの隣にいた中年の女性が降りた。運が翔にウィンクしたようなおかしさだった。

翔はわざとゆっくり立ち上がって行動を起こした。そうしている間にも、誰かがさっとその席に坐ってしまったら、何気なく立ち去るつもりでいたが、運は執拗に、翔にピカちゃんの隣の席に移動することを勧めているようだった。

「あのう、あなたは、バレエを踊っておられる佐田光さんですね」

翔は坐りながら言った。

「そうです」

翔はもっと細いきんきんした声を想像していたが、意外と男性的な声であった。

「僕はこの間、あなたの『コリント人』を見せて頂いたんですが……」

「それはありがとうございます」

にっこりすると、瞬間、顔から冷酷さが消えた。

「実は今、あなたに声をかけようかどうしようか、ずいぶん迷ったんですよ」

翔はピカちゃんに言った。

「迷うことはないでしょ。僕の舞台見て喜んでくれたんなら」

「踊ってる時って、客席見えてます?」

「日によりますよ。見てる時もあるし、見てない日もあるし」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「実は僕、あなたの公演を見た日、さくらさんといっしょだったんです。あなたは多分、気がついていなかったと思いますけど」
ピカちゃんは、初めて翔の横顔に注目した。
「あなたが、今、さくらといっしょにいる人？」
「いっしょにはいないんですよ。僕には家庭がありますからね。僕、天馬翔といいます」
相手が黙っているので翔は続けた。
「あなたはまだ若いから、人生の方向転換なんか簡単にできるんだけど、さくらさんと別れたのはあなたの方の理由ですか。それともさくらさんに原因があるんですか？」
考えようによっては、これは相手を罠にかけているような危険な質問だった。
「僕が答えなくったって、あなたはいっしょにいれば、わかるでしょう」
ピカちゃんは突き放したような視線を見せた。
「いや、わかるようなわからないような状態なんですよ。だからあなたに聞いてみたいと思って声をかけたんですけどね。
あなたと暮らしてた時、彼女の方が年上でしょう。だから彼女の話によると、あなたのパトロンみたいな立場だったような印象なんだけど、ほんとうにそうだったんですか」
「さくらがあなたに意識的に嘘をついてるとは思いませんけどね。僕は彼女のお守りをして来たと思ってます」
「なるほど」
「いっしょに暮らし始めた頃わかったのは、彼女が一種の色情狂みたいだったってことですよ。

性的に一人じゃいられない。町へ行って男を拾ってたから」
「そこまでは知らないんですけどね」
「でもそれは、なぜか少しずつ治って来たんですよ。しかし今度はキニスル病気が始まったから」
「何ですって？」
「あれこれ、やたらに人がどう思ってるか気にする病気です」
「なるほど」
「スープの温度からトーストの焼け具合まで、やたらに気にするんですよね。熱かったかしら、ぬるかったかしら。焼き足りなかったかしら、焼きすぎかしら、ですよ。僕、あんまり、食べ物に興味ない方だから、トーストが白くたって焦げてたって、どっちだっていいんだ。そのことは彼女知ってるはずなんですけどね」
「僕は食い物に興味があるから、食事に気を遣ってくれる人に会うと嬉しくなっちゃってね。その点では、彼女の存在がそんなに重圧にならなかったんでしょうね。それどころか、僕はトーストの焼き具合の話一つで、けっこう楽しくやれるんですよ」
「僕は、関心のないことに神経使うの、あんまり好きじゃないですね」
　ピカちゃんは言ったが、それ以上話題を発展させる気はないらしかった。それは、最早、さくらに興味がなくなっているからなのか、それともうっかり相手の消息を知りたがったりすると、さくらがよりを戻しそうでうっとうしいのか、理由は翔にはわからなかった。
「今日は、どこへ行くんですか？」

翔は仕方なく尋ねた。
「この次で乗り換えて、地下鉄で馬込の方へ行くんです」
一瞬、ほんとうかな、と思うほどのタイミングであった。しかし、翔から逃れるために、そう言ったとも思えないほど、その言い方は自然だった。
もし翔がピカちゃんの立場なら、最初からこんなに落ちついていられるとは思えなかった。翔なら、「そういう話は今日はちょっと無理ですね。僕は五反田で下りなきゃなりませんしね。後、二駅しかないんです」などと予防線を張ったに違いない。
このピカちゃんは、ほとんど自分以外の世界のことは何も心配していないのだ。たとえ相手の質問に半分しか答えていなくても、彼は平然と「じゃ僕はここで降りますから」と言って立って行ってしまうだろう。慌てるということは、次に起こることを予測したりするからで、予測さえしなければ、この世でほとんどあらゆる心配も不安もなくなる。
「じゃまぁ、あなたもお元気で」
しょうことなしに、翔が別れ際に言うと、ピカちゃんは、
「ありがとうございます」
とその時はにっこりと営業用の顔になった。
今日は新宿まで、韓国の李健高という画家の展覧会を見に来たので、そのまま帰るつもりであった。しかし今のピカちゃんの話を聞くと、翔は何となく気になって、渋谷駅で降りると、さくらの勤めているペット・ショップに電話をかけた。
「まだ、いた？　もう帰ったかと思った」

「今閉めようとしてたとこ。私……」
「どうしたの？」
「あなたには悪いと思ったんだけど、今日あなたのうちに電話してしまったの」
「ちっとも悪くないよ」
「今日は会えない？」
「会えるよ。知ってるじゃないか、僕、いつだって暇なんだから」
翔はさくらとの電話を切ったその足で、と言いたいところだが、その手で自宅の電話を呼んだ。
「ああ、葉子？　無事？　何にも問題ない？」
翔はいつも聞くような質問をした。
「ええ、大丈夫よ」
「急ぐ電話もなかったね」
仕事をしてないのだから、あるわけがないのだが、普段から同じ言葉で聞く癖がついていたので、翔は葉子を試すという意図を気づかせずに質問を繰り返すことができた。葉子が、さくらからの電話を伝えるかどうかが見ものであった。しかし葉子はやはりさくらのことには、触れなかった。
「電話は、夕香さんからかかって来たの。朱美さんが入院したんですって」
「へえ、どうしたの？」
「急性の胃潰瘍なんだって。でも手術する必要もなくて今は落ちついていますからご心配なく、

って。でも、一、二週間入院するらしいわ。別にお見舞い頂かなくても大丈夫なんですけど、伯父さんにお知らせしないのも変だと思って、って言ってたわ。血圧もかなり前から高かったんですって」

「どうして急にそんなことになったんだろうな」

翔は言った。

「近日中に行ってみるよ。電話はそれだけね」

「ええ」

「今日は、僕ちょっと遅くなるけど……そうだな。最終の電車では必ず帰る」

「わかったわ」

「気をつけてね。玄関のドアの鍵、閉まってる？」

「大丈夫よ。閉まってます」

結局、翔がどこへ行くかを葉子は聞かなかった。

歩きながら、翔は、朱美の胃潰瘍と高血圧のことを考えていた。朱美は翔と四つ違いで、まだ四十三だから、若いという年ではないかもしれないが、大病に取りつかれる年でもない。

「ああ見えても、苦労してるんだろうなあ」

翔は呟いた。

八月の終わりに会った時には、翔に対する敵愾心に燃えていて、朱美はちょっと魅力的に感じられたものであった。怒られながら、いい女だと感じていたのである。しかし、そんなことを朱美が知ったらいっそう激昂するだけだから、翔はひたすらうちひしがれ、うなだれて、恭

順の態度を示していたのだが、昔風に言えば柳眉を逆立てているという感じで怒っている女には、食指が動くものであった。

あの鶏冠を振り立てているような姿勢は上辺だけのもので、実は何が理由かわからないが、心では堪えていなければならないものがあったのだろう。

電車に乗ると、今週の週刊誌の、電車の中吊り広告が眼についた。「あなたの健康をストレスが狙っている」というのである。翔は思わず、隣の人に聞こえそうな声で独り言を言った。

「僕、ストレス皆無だなあ」

翔はさくらの顔を見る度に、オジヤと似ているなあ、と思うのであった。

犬と人間との美醜を比べることはできないが、どことなく「二人」は似ていた。鼻に皺を寄せて笑うところがそっくりなのである。

「どうした、よしよし」

と翔はさくらにも言うことがあった。挨拶代わりにそう言って抱き締め、頬ずりする。犬に対するのと同じ言葉だと、さくらは気がついたことがない。

「ねえ」

顔を離すとさくらは翔の胸の中で言った。

「私、犬の匂いがしない？」

「君の匂いがする」

翔はさくらの髪の中に顔を埋めて言う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com